

イネの「永遠思考」を体現する人

岡隆夫詩集『二億年のイネ』に寄せて

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞞ラス

イツモシツカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

(略)

〔「雨ニモマケズ」宮沢賢治の手帳から〕

根本的にどこか生態系が壊れてしまったおかしな存在になつてしまったと思わざるを得ない。畦に撒かれた除草剤・殺虫剤は田に流れておちて、それは稲穂にも吸収されているだろうか。すると私達の食べている米は多くの除草剤や農薬づけになつていてのではないか。なぜ農民は、農薬・除草剤などに頼つた米作りをしなければならないのか。多くの疑問が湧いてくるのだ。引用した宮沢賢治の有名な手帳に記されてあつた祈りの詩行には、「一日ニ玄米四合」と記されてある。その当時の日本人の大人は四合の米を食べていたらしいが、きつと今の米とは全く別物であつたと思われる。昭和の初めの新鮮な水と空気と土壌から育つた米は、米だけ食べても美味しかつたに違いない。今は他の食品が増えたということもあるが、一日一合か多くとも二合ぐらいいしか日本人は食べなくなっているだろう。それは、米そのものが無味乾燥的な味気ないものに変貌してきているのかも知れない。米はその地の自然の生態系から収穫されたものではなく、他の生きものを排除し続けた結果の人工的な商品に変わつてしまったのではないか。イネ・米の変貌は結果として単位生産量を増やしているが、日本人の一人当たりの消費量は減らし続けている。賢治がいま生きていたら、日本の米作りを果たしてどのようなで語つていようか。きつと岡隆夫さんが詩集『二億年のイネ』で語つているように、今の米作りは根本的に化学肥料や除草剤・殺虫剤に頼つた在り方でいいのか、という指摘に賢治も

私の暮らす柏には手賀沼があり、周辺にはいまだ田や畑が広がっている。実り始めた青い稲穂を眺めながら畦を散歩していると、八月上旬頃なので、ツユクサの青い花やオモダカ、アギナシの白い花が咲き、シオカラトンボが舞っている。小さな案山子も立っているが、スズメはあまりいない。セグロセキレイが稲穂の上を飛び跳ねている。しかし手賀沼の遊歩道に添った畦に近づくと、畦が灰色に枯れている。枯れた中から再び緑の草が伸び始めてもいるが、焼け跡を踏みしめるような感覚だ。きつと何らかの除草剤が撒かれたのだろう。三十年近く前にこの地に来てから、私はジョギングをしながら周囲二十キロの手賀沼周辺地域の変貌を見詰めてきた。土堤はコンクリートブロックで補強されて、遊歩道も歩きやすく整地されて、小ぎれいになったことは間違いない。しかし手賀沼の水辺は遠のき葦原が広がり、水辺に生えていたミゾソバ、イシミカワ、シヤクチリソバなどの野の花もめつかり減つてしまった。手賀沼内だけでなく、外の田の畦には除草剤・殺虫剤が撒かれそこに自生する野の草花や昆虫などの生きものは排除される。かつては蛙の鳴き声が聞こえていたはずなのに、今はどこからも聞こえてこない。宮沢賢治を世に広めた草野心平が愛した蛙たちは、この地にはもう死滅してしまつたのか。唯一手賀沼内から牛蛙の鳴き声がするが、それも少年たちが釣り上げてしまひ大きな牛蛙が遊歩道にさらされているのを見たのは辛かつた。蛙と共存できない我々は、

共感するだろうと私は推測する。日本はやはり広く、まだ捨てたものではない。このような実践的な詩人がまだ存在することを私は詩を志すものとして誇りに思う。

その場所には、微風が吹いていた。私は二〇〇七年五月に、平安時代まで歴史を遡れるという集落にある岡隆夫さんの農園を訪ねた。JR福山駅近くで私と待ち合わせ、自動車で行してくれた大原勝人さん、大山真善美さん達と一緒に岡隆夫さん宅に向かつた。門から庭に入ると、細長い苗床が幾ヶースも並んでいた。不思議に思っていると、岡さんはこれが赤米、黒米、紫黒米などと六、七種類の古代米の名を挙げた。私は岡さんの詩がこのような農業実践の中から本格的に生み出されたものであることを目の当たりにした。一連のイネ・米を主題にした連作は、農作業で検証しながら新しいリアリズムの詩的精神に裏打ちされていたのだ。岡さんはその試みを自ら「新・叙事詩」だと私に語ってくれた。宮沢賢治は一九三三年秋に亡くなる日まで、農民からの稲作の相談を受けていた農民指導者であり農業技術者だつた。寒冷地に強い陸羽一三二号種の作付けを農民に勧めたり、東北の酸性土壌を中和させるために炭酸石灰を広めようとして命さえ縮めた。岡さんは現在の農薬づけの稲作の在り方を根本的に批判し疑問を突き付けている。その思いの強さがこの長編連作を可能とさせたのだと思う。賢治の時代は、イモチ病や冷害からの

不作が大きな課題であったが、現在の課題は農薬づけの農業からいかに化学肥料に頼らない米作りに新たに展開できるかを問いかけてきているのだ。岡さんはその本来の生態系を重視した地力を生かした農業の在り方から離れ、一部の稲しか栽培しない農業の在り方を、誰よりも憂いている。その他の生物と相容れない化学肥料に基づく農業を徹底的に批判して、この詩集を警告の書として書き上げた。私は岡さんがこの時代を危機と苦悩を直視し、果敢な詩的精神で挑んでいく姿を現代の宮沢賢治のような詩人だと、心ひそかに考えていた。

岡隆夫さんの農園には、たえず微風が吹いていた。この瀬戸内海から吹いてくる風が、岡山県浅口市鴨方町六条院という土地を、地中海に似た風土にしてきたという。この地の名産である桃などの果物は、この風によって虫がつきにくく、豊かな恵みを産出している。前を行く岡さんは立ち止まり、肥料のことを語り始める。岡さんの有機肥料の作り方は独自のやり方で、枯葉や野菜屑を積み重ねて堆肥化しその滴を下に溜めて、何か葡萄からワインを搾るように液体の有機肥料を作っていた。その肥料だけを野菜や果樹に与えられているという。岡さんは野菜や樹木の葉に目を留めて、「おできのようなものだから、この葉は取ってあげないと」と独り言をいしながら、あたかも子供の頭を撫でるように手が伸びて病んだ葉を一瞬でむしり取っていく。その自然な動作は、賢治

のいう「野の師父」のようだった。

麦をまく

エミリイ・デイキンソンに捧ぐ

わたしは麦をまく

北米の平原を埋めつくす大麦準一級をまく

エミリイ・デイキンソンが死出の旅路で目にした

最後にして唯一の植物が「麦の穂」だったから

わたしはそのため麦をまく

大麦 ダイズイ 芒々 ボトボト

大麦 ダイズイ 芒々 ボトボト

麴麦 ムクメ 麴々 バクバク

麴麦 ムクメ 飯麦 イヒメ 麴々 バクバク

どんな麦の穂先がデイキンソンの魂を動かしたのか

なぜ麦の穂が彼女の魂をゆり動かしたのか

麦の穂に動かされた彼女の魂の深奥とは

それが知りたくて

わたしは麦をまく

わたしは麦をまく

古代エジプトの沃土に稔ったマカロニ小麦準一級をまく

麦が色づく麦の秋にいらしてみませんか

スクツと立つしろい茎稈 くま さわさわと揺れる葉群れ

淡褐色一色の億万の禾・禾・禾 のぎ 一面に漂う麦藁の香り ばらばら

〔第十四詩集『麦をまく』の表題作より〕

岡さんは岡山大学の英文学の名誉教授であり、アメリカの詩人エミリイ・デイキンソン協会を日本で創設し、デイキンソンの日本での代表的な研究者である。『デイキンソンの詩法の研究』は、デイキンソンの感性の奥深くに潜む「小なるものが大なるものに通ずる」という概念^①や「靈魂の不滅」を信ずる「永遠思考」を抉りだして、詳細な解釈を論じている。と同時に膨大な多くの研究者達の解釈も紹介しながら、デイキンソンの詩作の優れた試みとその謎を浮き彫りにさせている。この隠遁や無名であることを好んだ純粹詩人の全体像の魅力が明らかになってくる。学者の無味乾燥な研究書ではない、血の通った詩論と呼ぶに相応しい研究書だと私は感じて多くを教えられた。この「麦をまく」という詩は、岡さんのデイキンソン研究への取り組みが、書物の上だけでなく自己の生き方と切り結ぶように試みられている。「麦の穂に動かされた彼女の魂の深奥とは／それが知りたくて／わたしは麦をまく」という詩作の姿勢は、岡さんが誰よりも真正面からシンプルにデイキンソンの謎とその魂の内奥を探究しようとしているのが分かる。それも農作業という肉化した想像力を駆使した清々しい姿勢なのだ。この詩作の姿勢には、多く学ぶものがある。岡さんはデイキンソンの研究書の他にアンソロジーにも含め一六冊の詩集を出しており、今回は一七冊目の詩

集である。詩人、詩誌編集者、詩人団体のリーダー、英文学者、農園経営者など五つの顔を持っているが、根本的には優れた詩を書くために、自らの人生を芸術化してしまっている詩人であるということだ。

岡隆夫さんとは、二〇〇〇年九月に初めて高知県中村でお会いした。敬愛する浜田知章さんが詩誌「ONL」の山本衛さんたちに招待されて講演をするので同行したが、そこで初めて話すことが出来た。「詩脈」という詩誌を三十年も編集発行していて、中四国の詩人団体の中心メンバーの詩人だと紹介された。その際は、余り多くを話さなかったが、私は『浜田知章全詩集』を編集し中だと伝え、「COALSACK」(石炭袋)の最新号を手渡したのだった。岡さんは同行していた岡山の三沢浩二さんと同様に中国・四国地方の詩人たちの土壌を豊かにするために活躍されている詩人だと理解した。その後「詩脈」を一〇〇号で終刊し、詩作に専念するという話を聞き、「COALSACK」(石炭袋)にもお誘いし、寄稿してくれるようになったのだ。

六条院

梨山に梨の花がふぶき つつじはこぼれ

桐は空をうす紫にそめて咲きみだれ

ぼくの花壇は春の花々に埋れる——
他に何の理由があろう　ここ六条院にいることに
何のために？　優美なひだをもつ竜王山のためだ
その山なみを映す　池また池　瀬戸内の広がり
ぼくの畑からにじみ出る水は
ぼくの井戸を　ぼくの花壇を　枯らすことがない

みなが捨て去り忘れようとしているもののためだ
麦のためだ　とうもろこしのためだ　土のためだ
夏草におおわれた小径　そこを通る父のためだ
工業用地からの硫黄の霧を遮ぎる竜王山
その枯れることのない松林のためだ
山麓の稲田のためだ　稲をつくる人びとのためだ
帽子を織るひと　手袋を織る人々のためだ
竜王をめざして帰る漁師
竜王を越えてくる魚売りのためだ
瀬戸内の漁師たちのもたらす潮のにおいのためだ

みんな遠くへ出るがいい　欲望の渦巻く都会へと
ぼくはここにいて　ぼくの花壇を組みかえる
ぶどうの手入れにいそしむ女たちのそばで
名うてのバラ造り　菊づくりたちのそばで

店をしているYさんたちがその葡萄園を復興させて欲しいと
名乗りをあげたという。そして二人のYさんの努力によって
奇跡のように葡萄園は復活したのだ。私たちが葡萄園に入る
と、話に出てきた一人のYさんが何か楽しそうに葡萄蔓の手
入れをしていた。ああ、この人は天職を生きているのではな
いかと眩しく感じた。背をかがめながら入った葡萄棚の下に
はオオイヌノフグリ、ハコベなど野の花が敷き詰められてい
た。この葡萄園が農薬を使用しない有機肥料の農園だとい
うことが分かった。清澄な空気がゆっくり流れていた。天の意
志により天職の人に力を借りて葡萄園は緑を芽吹き、蔓枝を
伸ばしていた。岡さんにとっては日常の光景だが、私は聖な
場所のような不思議なエネルギーをこの場所に感じていた。
私たちはこの場所に余り長居をしてYさんの世界を汚してし
まうことを恐れて葡萄園を出た。

捨てる神あれば

「今年のぶどう　どうですか？　被害ありませんでした？」
「やあ　台風は五回もやられてしまつて　ぺしゃんこですよ」
枝葉も幹も覆いもべったり這いつくばつて
手が付けられなくて呆然ですよ　ぶどうは止めます　すでに
三本ぶち切りました」

かれらにはぼくの咲かせる花の鮮やかさがわかる
かれらにはぼくの新たな花模様の意図がわかる
他にどうしてこゝを立ち去る理由があろう
六条院——この六条院の地を——

(第五詩集『追う』の「六条院」)

「この六条院の地を」愛する岡さんは、この地で今も野菜も
種から採り、それを蒔いて育て収穫している。多くの野菜が
雑然と植えられているようだが、岡さんにとっては、目をつ
ぶつても分かるように合理的に配置されているのだろう。畑
の中に一本の銀杏の大樹が立っていた。その樹は途中から曲
がっていた。岡さんによると三十年以上も前に植えた樹で、
あえて曲げることによって影を畑に落とさない工夫がされて
いるという。実際に日差しの影は周りの野菜に落ちずに樹の
根元にのみ落ちていた。この銀杏の実もまた収穫されるのだ
ろう。有機栽培の実験農場に私たちは目をみはった。

微風がやや強くなり、雲が色濃くなり、雨が降り出しそう
になった。この地は気候が変化しやすいのだろう。私たちの
足は葡萄園に向かった。詩集の第十五詩集『ぶどう園崩落』
の舞台となったところで私が最も見てみたいと願った場所だ。
二〇〇四年八月三十一日の台風で葡萄棚が崩落し、一時は廃
園にしようと思さんは考えた。しかしそこに近所で電気工事

「ちょっと待つてください　ちょっと　岡さん　切ることな
いでしよう！
折角実が成つてるし　これからだつて成るでしょとにかく
切らないでください」
「切らなきゃ　あとは山ですよ　それとも横田さん何でした
らぶどう作りませんか」
「総社の横溝という知人に話したら　作らせて欲しいって言
ってますが——」

起こしゃあえーがー　と気慰みに言ってくれるかと半信半
疑でいたものの
横田・横溝両氏が　何と十月からぺしゃんこの山のぶどう
を起しにかかり
勤めもあるのに毎土日二ヶ月通い　基礎から柵を築き直し
新たな柵がしゃきつと張られた！　そう　横溝氏のぶどう
作りが始まるとは！

諦めていた他のぶどう園も起こしてくれろという！
さあワイン・パーティーだ！
四面四臂の二大明王のお蔭で　来年もふたたびぶどうの芽
が吹くか！

(第十五詩集『ぶどう園崩落』の「捨てる神あれば」)

野草が咲き乱れた葡萄園を後にする時に驟雨がやって来た。天の恵みのような新鮮な雨で濡れることが気にかからなかった。葡萄園の脇には岡隆夫さんが自分で建てた小屋があった。同行していた大原勝人さん、大山真善美さんと一緒に小屋に入ると、外国語で書かれた岡さんの詩のタペストリーが掛けられてあった。英文学者である岡さんの詩がヨーロッパで紹介された時、会場に掛けられた大きなタペストリーが一面に垂れ下がっていたのだ。机には私の知っている詩人たちの詩集も何冊か置いてあり、小さなストーブもあった。晴耕雨読に相応しい場所だった。岡さんは農作業に疲れると、この小屋に入り、農作業の実践と詩作とを深いところから結びつけ、一致させようと試み、構想し続けているのではないか。雨宿りをしながら雑談をしていると、驟雨は去っていった。そこに岡さんの奥様が息を切らせて雨傘をたくさん抱えてやって来た。雨に降られたでしょう、遅くなって済みませんと言い、奥様は優しい言葉をかけてすぐに去っていった。

前の晩泊まった福山のホテルのフロントマンとの話から、浅口市の果物農家は裕福で、その中心的な存在は旦那よりも奥さんだと言っていたことを思い出した。岡さんにそのことの意味を尋ねると、例えば代表的な果物である桃は、実の数を幾つ残すとか、傷を付けないで袋を掛けるとか、たった一日の最適な収穫日を決めて実行するとかは、全て女性の繊細な感性を生かしてやるので、どうしても奥さんが中心にな

くくりつけ

五歳の僕に子守をさせ

畑仕事にいそしんだ

母は男のように言葉少なく耕した

しかし母であることを止めず

男の誘惑と闘った

ある夜のこと

四十に満たない女盛りの母を

近所の男が求めてきたとき

母は次のように言えと言って

障子のうしろに身を隠した

「おかあちゃんは本家へ用事で

行って おらん」

僕は五歳だった

五歳で大人の不浄を察した

それから数日後だった

また男がきて風呂に入っている母に

会うことを強要した

僕は風呂の戸の前に立って

「かえれ かえれ かえれ――

るのだということ話を話してくれた。岡さんはこの農園を興さんといっしょに作り上げ、いまも運営している。農園の母なる力は私の想像を超えていたことが良く分かった。岡さんの詩には、母を書いた詩に秀作がある。次に引用してみる。

母

長年にわたる遅々とした離別

― 郷愁の泉 ―

昭和二十年の大雪のある冬の日

三十五歳で夫に先立たれ

母は四人目の女の子を分娩した

その後 母は女であることをやめ

男になり切って

終戦のドサクサの中を

血を吐きながら

僕らを育くみ生き抜いた

炎天下の畑の中に杭を打ち

それに傘をむすびつけ

それによちよち歩く二歳の妹を

かえれ かえれ」と怒鳴った

十八年の年月が僕らの生活を

追越した

僕は母の担ってきた仕事の大きさと

思いやりを測り知ることができない

母は疲れた

根は男でなかった

七年前からリウマチを病み

指は握ったまま伸びず

足の指も一束になり

不具になった

病床からも尚僕らを心配している

母の大きさを測り知ることができない

その母がつい先日ひょっくり亡くなった

大海原のような母が

その死は遠くの海上で音もなく

消えた花火だった

しかし海の波音はいつも僕の耳の

中で鳴っている――

僕は母への追憶に

偽のない感謝を送る

長年にわたる遅々とした離別
郷愁の泉――

(第二詩集『山の爪』の「母」)

岡さんの詩「母」は、膨大な岡さんの詩篇の中でも最も心に残る作品の一篇だ。ここには一人の人間の生き方として誘惑を振り切つて、母子の生活を守る意志の強さを示した存在者がいる。五歳の岡さんも母を守るために「かえれ」を腹の底から怒鳴り、叫び続けたのだろう。その母子の闘いが劇的に表現されている。岡さんが母を畏敬する気持ちが溢れ、読む側も守るべき価値のためには女を捨てて母になつた一人の女性の逞しさをこの一篇の詩から瞬時に感じとれるのだ。人は試練を通して、自己の欲望をどこかで断念しなければ、母にも子にも簡単にはなれないことを告げているように感じさせてくれる。岡さんにとつて、きつと農園の畑や田は、母が男になつて切り拓いた母の肉体のように思っているのかも知れない。それゆえその農地に除草剤・殺虫剤・殺菌剤などの農薬や化学肥料を多用することは、許されないことなのだろう。永遠の相のもとに田や畑を守るにはどうしたらいいか。岡さんは長年考え、実践してきたことを世に問うことを意志して、今回の詩集を構想したので。

神代のむかしから豊葦原の瑞穂の国に
コメは普遍的に在るべくして今なお在りつづけ
明日も明後日も未来永劫在りつづけると――
絶妙のカップル朝日米・銀坊主を曾祖父母とし
農林一号を父方にもつ農林一〇〇号コシヒカリ！
至るべくして至り得た一等米コシヒカリ！
それが農薬漬けとはつゆ知らず いや多少知りつつも――
除草剤ミスターホームラン反当一キロ
それで効かなきヤサーベックス粒剤四キロ
八月上旬ウンカの防除にミスタージョーカー粉剤四キロ
八月下旬イナゴの防除にホクセツト粉剤四キロ
マニユアルどおりで十三回 少なくとも七、八回

(略)

毒性が低きい言うけん作る者売る者食べる者みんな無関心
てんからかんの田の草取りやあせーでもええけん御の字じゃ
草枯らしゆう撒えときゃあ田へ入るこたあありやせん
じゃけえど除草剤サターンMはダイオキシンまで含む劇薬
BHCやパラチオンなど二一種類も発売禁止じゃそうな
今まで農薬二八三種は基準内で安全じゃいうて喧伝し
J・A・スーパー・ホームセクターは売りまくつとつたけえ
ど

嘘じゃつたんじゃなあ やれ恐てえ恐てえ

葡萄園の後に、岡さんは田に連れて行つてくれた。しかし私たちがいつも見ている田ではない。一面にシロツメグサが敷き詰められている。その周辺と中に何本かの太い溝が作られている。シロツメグサに降り注いだ雨は溝に流れて、そこに水が溜まつている。最初に庭で見かけた古代米のイネがこの溝に植えられるという。その畑の脇にも岡さんが建てた小屋があり、収穫された古代米が納められていた。岡さんは自分と家族のための古代米をここで実験栽培をしていたのだ。不思議な田だが、ほとんど手の掛からない田であるらしい。岡さんはここに至り着いたという思いで私たちに古代米の現場を説明してくれた。そこには今の米作りへの疑念と深い絶望があり、それに気付いて欲しいという激しい情熱を私は感じたのだ。

岡さんの新詩集『二億年のイネ』は第一章「コシヒカリがこわい」十篇、第二章「二億年のイネ」十二篇、第三章「指がとび」十篇の計三十二篇から成り立っている。

農薬汚染大丈夫かな？安全かな？との意識も疑念もさらさらもたず 二十六万人の全農J・Aの職員さん

(略)

農水省・通産省・食糧庁三万七千人の職員さん
安心しきつて天下の名品コシヒカリ！

〇六年から残留農薬新基準の厳しい制度ができ

七九九種の農薬が対象じゃ言うて六道湖岸の川シジミはダメ

メ

中国は日本に輸出できにくうて八七件ダメで困つとるそう

じゃ

へえでもどの道 農業は減りやせまあ のうなりやせまあ

米の異品種混入は避けられないので最大混入率〇・四%にすれば

〇・四%古米や異品種を混入する業者が現れる

七九九種の農薬等の規制法が公表されるや

全農J・Aは二二六種もの農薬基準品目を促進する！

「効果に優れ、低コスト・省力・安全の目標

組織をあげて全国的に推進を図る」とは！

そのうち水稻品目一三〇種―除草剤ザ・ワンなど七四種

殺菌一六・殺虫一一・混合二九 園芸品目には別に九六種！

さらにこれらを特別重点三六・重点一四・系統一七とくる

この夥しい数量！ ヒルズ族のみなさん篤とご存知あれ！

シロアリ駆除用クロンがじつは除草剤でもあったとは！

ダイオキシン類を含む農薬がなんと二〇六種もあるとは！

「効果に優れ」とは複合毒性が何百年残留するか予測不能

○一年鳥取の八束川では鮎が大裏死しデリス剤が検出され「低コスト」とは何種でも大裏に買え幾らでも製造でき輸出でき

「省力」とは平成の世の弛緩と怠惰にはもってこい
「安全」といわれても七九九種の組み合わせは十五万通りその組み合わせも自由自在 裏の規制も法令もなし——
全農JA・農業委員会は一休何を見 どこを向いている？
国 地方局 己のお臍 農家 消費者の順なのか
一般化させた農薬を売りまくる巨大営利団体に墮したJA！
民の食と健康維持の使命感はいつたいたいどこに？
危機意識に乏しい国の提灯もちに過ぎないJA！
「今月のリスク」まかせ行政まかせのわたしたち
（『二億年のイネ』の第一章「コシヒカリがこわい」より）

新詩集の冒頭の詩「コシヒカリがこわい」は、私が手賀沼脇の焼け跡のような灰色の畦を踏みしめた時の違和感・疑問点を解き明かしてくれている。「サターンM」などの除草剤によってあの八月の畦の廃墟は引き起こされたのかも知れない。蛙一匹いない田には二番目の詩「農薬一発イネグリン」などが散布されているのかも知れない。岡さんは「二十六万人の全農JAの職員さん」と「農水省・通産省・食糧庁三万七千人の職員さん」と「行政まかせのわたしたち」の共犯関係を客観的なデータを駆使してあばきます。一人の

ごく微裏のグラベリマが西アフリカにある

（略）

二億年以前ゴンドワナ大陸に
野生イネの祖先種があった
四五〇〇万年前インド亜大陸がユーラシア大陸に
衝突するまで進化し その後も進化しつづけた
Sativaの祖先は野生種オリザ・ルフィポゴン
サティヴァが栽培種の源だと知った賢治は
人類の起源や人間の定住について想いを巡らす——
（略）
古人はわが国を豊葦原の瑞穂の国と呼びならわした
姿形の類似した葦と稲とともに湿地に繁茂するため
葦属は稲属オリザの従兄弟に当たることを察していたか
国土の三分の一もの山なす大和を豊かな葦原と見定め
より豊かな瑞穂の国にと乞い願ったろうか
千数百年先を見越した何と壮大な夢だったか
「豊葦原」——なんと花も実もある枕詞か
（詩「二億年のイネ」より）

岡さんは今の日本の稲作の現実を憂いながらも、稲の二億年の歴史を賢治のように思い巡らす。そして古人が命名した「豊葦原」の願いを永遠の相のもとに反復しようとする。私たちの本来的な食や暮らしの原点は何なのかを問いかけてくる。

有機栽培の実践者であり、本来的な農業を目差す単独者として、戦後の農業政策の歪んだ在り方を正そうと声をあげている。「コシヒカリがこわい」という詩題が引き起こす危機意識を他人事に思う日本人のだらけ切った精神状態を岡さんは「平成の世の弛緩と怠惰」と指摘する。この詩集はその意味で日本人の精神性、生活様式、美意識の根幹が腐り始めていることに警鐘を鳴らしているのだ。このような激烈な意志を持って詩集を編んだ例を私は知らない。この詩集を岡さんは「新・叙事詩」だと語っていた。自己の生き方を踏まえて、客観的なデータを駆使して、果敢に私たちの暮らしの元である食糧の安全を徹底して追及した詩集なのだ。このような詩集は存在したことはなかった。「低コスト」「省力」などを目的にしてしまうとどういような農村の風景が出現してしまうか、その恐ろしさを痛感させられるのだ。この新詩集は、詩人よりも食の安全や自然の生態系を優先した農業を支援する人々に読んでもらいたいと願うばかりだ。

「オリザみんな死ぬか、オリザみんな死なないか」

賢治にとつてオリザは人間以上にいとおしく

Oryza sativa とかれは原語で詩を書いた

オリザ族には五二のオリザ属があり

栽培種はサティヴァ属とグラベリマ属のみ

オリザ・サティヴァが世界の九割九分

私は近くの手賀沼内の葦と沼の外の稲が従兄弟であることを知り、内と外が実は古代にはつながっていたことに驚きを感じた。いま農民に農薬を勧める勢力によって分断されているが、根底では共通な先祖をもっていたとの指摘は、とても面白い。自生する葦と人為的なコシヒカリは本来は同じ起源をもっていた。「二億年のイネ」を視野に入れて米を考えて、どんな米が自分たちに相応しいか、子孫に伝えたいいかを岡さんのこの三十二篇から痛切に問われているのだ。岡さんはディキンソンを論ずるようにイネと人間が培ってきた「永遠思考」をよみがえらせようとする。私たちが日常的な感性によって「永遠思考」である「二億年のイネ」の存在に気づいて欲しいと訴える。

「明治十二年には四千種あったイネが今では二六〇種！」（「コシヒカリ・コシヒカリ」に減少し、コシヒカリ系の品種を中心に収摘されようとしている、と岡さんは詩「コシヒカリ・コシヒカリ」で指摘する。地域や風土に相応しい遺伝子を抱えていた多様なイネを駆逐してしまう今の米作りの危うさを、身をもって語っている。そのことによって米を主体とした私たちの食生活の安全が脅かされ、どのような重大な問題点があるのかを体験を踏まえ、データを駆使しながら事実の重さ突き付けていく。一篇一篇に込められたイネ・米への愛情が溢れてくる詩篇であり、イネ・米とともに千数百年を暮らししてきた日本人への賛歌なのだとと言える。

自らの例えば第三章「指がとび」のような痛み体験を通して、私たちの生活スタイルの歪みを語ってくれたのだ。他者依存の食の安全、環境問題を根底から問うている姿勢は多くの学ぶべきものがある。米作りの思想を詩で語る試みは、岡さんのいう「新・叙事詩」として実現されたのだ。この試みは画期的なことだと私は考える。農業・食の安全性や地域の多様性を願う人やその実践活動をしている人々、また農民、全農JAの職員、農水省・通産省・食糧庁の職員の方々にもぜひ読んでもらいたいと私は願っている。そして岡さんはこれからも永遠に続くイネ・米作りの根本的な在り方を語り合うきっかけとなるのを誰よりも願って、この詩集を刊行したのだと、今の私には痛切に感じられるのだ。